

# 下田歌子先生再入門

——年譜作成上の問題意識から——

高瀬 真理子

次頁を見ていただきたい。

ここに一枚の写真がある。これは羽田海水浴場の開場記念に販売された絵はがきである<sup>1)</sup>。

明治四十四年七月五日、京浜電気鉄道株式会社（現在の京浜急行）が乗客誘致のために資金を投じて羽田海水浴場を開設している<sup>2)</sup>。この写真には、大隈重信が主として写っているが、「報知新聞社と提携し、同社の主催で、大隈重信や渋沢栄一など来賓を迎え開場式を挙行<sup>3)</sup>」した。この写真を掲載した『月刊おとなりさん』の記事によれば、「開場式では、実践女子学園の創設者である下田歌子女史も演説した<sup>4)</sup>」とある。また、『報知七十年』には、「羽田扇ヶ浦に、本社主催の海水浴場開場式を行ふ。大隈重信伯、澁澤榮一男、下田歌子女史といふ當代第一流の顔が揃ひ、頗る豪華な開場式であつた。それが人氣を煽り、十六日の敷入りには入場者一萬を超え、羽田始まつて以来の壯觀を呈した<sup>5)</sup>」とある。こう

いう顔ぶれが開場式に祝辞を述べたことが、客の出足にも影響したような書きぶりである。

大田区臨海部の余暇利用については、明治十七年の八景園の創設に始まり、明治二十四年には、東京湾初となる大森海水浴場が開設されている。明治二十七年以降、羽田地区に鮎泉街が形成され、保養歓楽地として発展していく。それらの評判もあつてか、明治三十五年には、美子皇后が八景園内の加納子爵邸を訪れている。明治四十四年の羽田海水浴場の開設は、この地区の余暇利用の頂点に位置する四箇所目の海水浴場として開設されている。

さて、次頁のこの写真、大隈伯から目を転じてよく見ると、卓上の花の陰に一人の婦人が座っていることが分かるが、どうやら、これが下田歌子であるらしいことが分かる。あふれるような紳士諸氏で真つ黒に見える中で唯一の女性著名人、これが下田歌子であり、常に歌子を取り巻く光景であつた。下田歌子とは、こ



羽田海水浴場開場式 大隈伯の演説

ういう風景の中を生きた「當代第一流」で「豪華」の一端を担う女性であったことを、まず、指摘しておきたい。下田歌子は、明治四十四年七月十日の『読売新聞』には、大きく『婦人禮法』について「下田歌子先生新著製本出来」と実業之日本社の広告が載り、人気の著者であることがうかがえる。

この年、満年齢で下田歌子は五十六歳である。私立実践女学校を創設して十年余、渋谷を拠点に、日清関係に女子教育を通じて貢献、清国の女子留学生を受け入れたり、要請により蒙古カラチン王国（現中華人民共和国）に教え子を推薦して派遣したり、日英博覧会に参加し、生徒たちの工芸作品を出品したり、歌子自身の英文歌集を発刊するなど、国際的に活躍する女性著名人であった。

つまり、男性優位のこういう写真に代表される社会を生きる、もしくはこういう風景の中を生き抜くにおいて、男性でなく女性でありながら、これだけの実績を示しつつ生きていくには、どんな努力とどんな配慮が必要であったか、また、歌子はどのように見られていたのかを考えさせる端緒となる写真である。

次に、下田歌子の氏名を入れてパワーポイントをクイックスタートさせるとソフトは、右のスライドのような資料を自動で作る。筆者はタイトル以外に手を入れていない。このスライドによると、平尾鉞の生まれ年は嘉永七年となる。私たちは安政元年と呼び習わしているが、これはどのように考えるべきなのか。

## 下田歌子先生再入門（クイックスタートに任せると）

トピックに関する重要事項

下田 歌子（しもだうたこ、出生名：平尾 鉦（ひらお・せき）、嘉永7年8月8日（1854年9月29日） - 昭和11年（1936年）10月8日）は、日本の明治から大正期にかけて活躍した教育者・歌人。女子教育の先覚者で、生涯を女子教育の振興にささげ、実践女子学園の基礎も築いた。美濃国恵那郡岩村（現在の岐阜県恵那市）出身。岩村藩士の家に生まれる。幕末に勤王派の藩士だった父は蟄居謹慎を命じられるが、苦難の中、鉦は祖母から読み書きを習い、5歳で俳句と漢詩を詠み、和歌を作るなど神童ぶりを発揮した。書物を読んで善い事だと思ふと、すぐに行動にうつす事も多かった。『二十四孝』という親孝行を書いた書籍に両親が蚊に刺されるのを防ぐため、自分が裸になって蚊を引き寄せたという内容があり、それを実際にやったという。

[ja.wikipedia.org](https://ja.wikipedia.org) - 下のテキストCC-BY-SA ライセンス

幸いにして「安政の大地震」についての議論がある。その日付から推して「嘉永」なのか「安政」なのかというものである。湯村哲男は、「過去の被害地震の和暦年代を見ると改元についての考慮がされていない」とし、「たとえば、『安政元年の大地震』といわれている古今未曾有の大地震が発生したのは、安政年間ではなく、嘉永7年11月4日であり、この大地震後11月27日に改元されて安政となったのである。したがって、通称『安政の大地震』は本来ならば、『嘉永の大地震』と称されるべきである」と述べている。なお、添えられた西暦で見るとその震災日は、一八五四年十二月二十三日となる。湯村に対し、神田茂は「本邦における被害地震の日本暦の改元について」において「明治以前は大日本史料その他普通の年表は正月1日に改元を遡っている」と述べている。「明治以前の改元は、詔勅に『慶応4年を明治元年とする』という意味のことだけが記されていて従って改元前に遡り、1月1日から明治元年と呼ぶので、すべての歴史年表は1月1日から改元後の年号を採用する」とある。結論として明治以前は、一月一日に遡って改元となるので、大正以降の改元とは、「別の取り扱いをすべき」と「慣例に従うべき」ことに注意を促しつつ、「嘉永7年11月4日の大地震」は、たとえ改元日が十一月二十七日であっても、「安政の大地震」とよんで「差支えない」としている。この頃には、天皇の代替わりによる改元ではなく、天変地異や重大事件が頻発すると改元をしていた経緯もある。天変地異や、時代的に激動期に突入したことを重大視して「安政」を祈つ

ての改元であつたと推測される。

これに則ると下田歌子の誕生日とされるのは、安政元年「8月8日」となるが、西暦に直すと確かに「1854年9月29日」となることも確認しておきたい。

また、明治五年十二月三日をもつてグレゴリオ暦の明治六年一月一日とし、旧暦の使用を改め、以降の和暦月日は現行西暦と同じになるが、それまでの日付については、読み替えが必要である。たとえば、明治五年に平尾鉾は宮中に出仕しているが、その日付は十月二十三日となっている。後年の資料も当時の辞令の日付を踏襲しているようなので、新暦に統一する場合、実は一八七二年十一月二十三日に該当するのではないかというような問題である。旧暦使用による年譜上の日付のずれを新暦に修正し、統一していく作業の必要性が生じていることも併せて指摘しておきたい。

年譜作成の観点から津田梅子関係資料<sup>11</sup>にあたることが多いが、下田と津田関係資料とを照合すると食い違いも発生する。たとえば、下田歌子の桃天女塾創設について、『津田梅子文書』や山崎孝子『津田梅子』の年表では、明治14年となっており、他にもこれを踏襲する論文があるが、たとえば、実践校会が長年配布してきた『下田歌子小伝』<sup>13</sup>（以下「小伝」とする）には、明治15年「私立桃天学校を創設して、上流子女の教育に当たる」とある。この違いのもとにあるのは、おそらく『下田歌子先生伝』<sup>14</sup>（以下「先生伝」

とする）であると思われる。「先生伝」では、以下のような記述がある。

明治十四年、辛巳の歳の某日、先生はさうした周囲の懇望と懇望もだしがたく、意を決してまづ蹶起した。そして別に業々しい看板こそ、玄関先に下げはしなかつたけれど、その麴町區一番町の邸宅を、みづから「桃天女塾」と呼ぶことにした。

しかし、『実践女子学園一〇〇年史』<sup>15</sup>では、「時代の進展に伴つて、東京や京都で私立の女学校や女塾が次第に設立されるようになり、自分たちの子女も含めて新時代にふさわしい女子の教育を有能な女性教師の手に託したいという要望」と「平尾家の生計維持」という「家庭内の事情」から明治十五年に麴町區一番町に住居を移し、同年三月に「下田学校開業上申書」を提出し、六月に校名を「桃天学校」と改称したと述べている。本学には、前述の「下田学校開業上申書」と「学校名称改定届」が保管されており、事実関係はこれによって確認できる。しかしながら、長年下田研究の基本とされてきた「先生伝」に依拠したと考えられるものについては、このような違いが発生しているのはやむを得ない。

さて、津田梅子関係資料との照合作業によって、津田梅子と下田との接点や関係を改めて知ることができる。二人が出会うのは、明治十六年十一月三日のこと、同年十一月二十八日に鹿鳴館



開館を控えた欧化政策が強力に推し進められている時期に、井上外務卿官邸で開かれた天長節の夜会において、当時十九歳の津田梅子は、伊藤博文を介して当時二十九歳であった下田歌子に紹介される。その後、津田は、伊藤博文の招きによって伊藤邸に客分として滞在し、英語や社交の振る舞いなどを教授していた時期がある。前年に桃夭女塾を開いたばかりの下田歌子は、英語教育の重要性を十分認識しており、桃夭女塾の英語教師に津田を懇望、伊藤博文の仲介で、津田梅子は明治十七年二月から桃夭女塾で英語を教授する傍ら、歌子にも英語を教え、代わりに歌子から日本語や習字を習うことになった。<sup>17</sup> また、この桃夭女塾の最初の入門生の一人であった辻村靖子は、津田梅子が後年私塾を開いた折に国語教師として招かれている。<sup>18</sup>

さらに、華族女学校の開学について、山崎孝子は、「梅子が伊藤家に滞在中に宮内卿に任ぜられていた伊藤と、彼の意を受け奔走した下田歌子」によっていることを指摘し、明治十八年の「十月から授業を始め、十一月に開校式を挙げた」という。<sup>19</sup> 下田歌子が夫猛雄を明治十七年五月二十三日に亡くしてから、あたかも四十九日待っていたように七月十日、再び宮内省御用掛を拝命し、華族女学校創設に尽力を始めたのであるが、美子皇后の意向だけでなく、山崎が伊藤博文の意向を示唆していることには注意を払いたい。山崎は、「開設当初は、学習院女子部から三十八名に歌子の桃夭女塾から約六十名、それに新しく入学したものも加えて生徒数は全部で百四十三名であった」としているが、前

身である学習院女子部より、桃夭女塾からの生徒が多いことも含めて歌子の尽力ぶりが目立つ。下田が華族女学校の幹事兼教授に任じられた明治十八年九月十四日付で、桃夭女塾の生徒たちの移籍も行われている。

「小伝」の華族女学校開設の項には、「幹事兼教授に任ぜられ、校長事務を代行する」という記載になっている。これはあたかも幹事であるから、別に校長があるにもかかわらず校長事務を代行したような誤解を与える記載である。山崎は「初代校長は谷干城で」「その後ほどなく同年末に内閣制度制定に伴ない、谷干城が第一次伊藤内閣の農商務大臣となつて入閣したあとは歌子が学監となつて校長事務を代行し、翌々年一八八七年（明治二〇年）に大島圭介が二代目の校長に就任した」と述べている。すると、歌子が校長事務を代行したのは、谷校長が大臣の起用を受けたので、校長業務に支障が出たからである。山崎の書きぶりで行けば、歌子が学監に任じられた明治十九年二月十日以降に校長事務を代行したことになるが、それでいいのかどうか確認が必要になる。しかし、山崎の記述は、内閣の動きや人事など、下田歌子の教育者としての歩みに当時の政治が密接に関わっていたことを明確に伝えており、歌子が自覚していたか否かにかかわらず、政治的には、伊藤系のカラーとして見なされていたのではないかということは、考慮していく必要がある。<sup>21</sup> 少なくとも津田梅子関係資料は、関わりのあった周辺の人物の動きを立体的に記述しており、このことは、下田歌子を自立した女性の先駆者として捉える上で

も非常に重要な視点である。歌子は、当時活躍した他の女性たちと同様にスキャンダル等に巻き込まれることもあったが、これについても政治力学が絡むのであれば、その意図や狙いはさらに分かりやすくなるであろう。

また、真辺美佐によれば、「明治二十年一月十七日には、皇后によって『女子服制に関する思召書』が内閣各大臣・勅任官及び華族一般に示達され」、「明治十九年の鹿鳴館における天長節の夜会をはじめ、これ以降に行われた夜会・宴会では、皇族妃はじめ参集したほとんどの婦人が洋服を着用した」と指摘している。その際、真辺は、村松梢風の『女傑伝』を参考に「それらの夜会・宴会には、『社交界の女王』と形容された華族女学校学監下田歌子も、毎回のよう洋装して出席していた」という一文を加えている。<sup>22</sup> 下田が「豪華」である理由は、このようなところにもあると考えられる。

政治力学の問題と関わるのが、大庭みな子が資料とした梅子の書簡<sup>24</sup>である。そこには、「ただ女を悪者にする風潮に、梅子は不快な面持ちである」と述べていて、たとえば一八八七年三月十六日付書簡を用いて、大庭は次のように述べている。

日本の男性は、素人の女には近づかず、女は正当な方法では男性に近づくことはできない。これでは結婚の相手を自分で見つけることは不可能である。社会は西欧化された新しい女の生き方には厳しく、森有礼夫人や捨松や、下田歌子のス

キャンダルについてもとても信じられないと梅子は首を振っている。

実際に下田歌子について触れた梅子の書簡に一八八六年十一月二十八日付のものがある。この年の二月十日は前述の華族女学校学監兼教授に任ぜられ、三月から明治二十年四月にかけて『国文小学読本』全八巻九冊を編纂刊行している時期であり、日付の前日に当たる二十七日付で正六位に叙されている。梅子も開校当初から華族女学校の英語教師であったが、当初は教授補、翌十九年の二月、職制の変更に伴い一時囑託教師となり、十一月には教授に任ぜられ、奉任官六等年俸五百円を受けている。<sup>25</sup> つまり、歌子にとつて順風満帆に見えるこの時期に梅子の書いたこの書簡は、この時代の女性の生き難さを現代に伝えるものである。

下田夫人は病気で寝ています。彼女の病気の半分以上は世間の噂のせいです。彼女は気管支炎を起こしているとかで、気の毒なことです。彼女は有名人なので、そして政府の学校のヘッドですから敵も多いのです。ゴシップはいつまで続くことや。

幸い捨松の噂は下火になりましたが、今では昔のように外出もしなくなりました。大山將軍はまた地方に旅行中で、捨松は子供たちと過ごしています。

この書簡の後半は大山（山川）捨松の消息であるが、大山元帥のような有力な夫を持つている捨松ですら、スキャンダルに巻き込まれ、いやな噂に悩まされる様子が書かれていて、ましてや特に後ろ盾のない未亡人の歌子が、どれほど苦しんでいたかが分かる書簡である。梅子は十二月七日付でも日本女性のおかれた不幸な立場を隠さずに書いていて、そこには歌子や捨松のことにも言及がある。また一方、そういうことが発生する原因について「政治的な理由がもちろんあります」と述べ、「その意味で、私が伊藤家に長く留まらず、伊藤氏が総理になつたのは良かったと思います。私は誰にも嫉妬や羨望の目で見られて悪口を言われることもなく、自分の道を進めて幸運でした」と書いている。<sup>26</sup>大庭は「奉任官待遇は下田歌子と津田梅子だけで、歌子は学監（梅子は副校長という言い方をしている）となり、年俸千五百円かそれ以上と言ふことだった。」と書き足して、梅子の言う「羨望や嫉妬」の自身に、身分地位だけでなく、女だてらに高額給料をもらうことについても示唆していると考えられる。つまり、下田歌子の業績を考える際に、華々しい業績の光の部分だけでなく、時代を先駆けていたが故の影の部分をも総合的に見て、きちんとくすく上げる必要があることを教えられる。器の大きな女性ではあつたろうが、万能ではない一人の女性の人生を追うことを考えれば、下田歌子の光と影の両方を追うことが、男女共同参画社会への先駆的開拓者の苦勞として、新たに見えてくるものがあるだろうと考えられる。

下田歌子を考える上で、もう一つ重要なテーマがある。それは皇后との関係である。歌子は、幼少期から和歌の才に優れ、また時代が幕末から明治へと大きくうねるときに生を受けたことから、奇しくも武家出身の女官という数奇な道を歩むこととなった。美子皇后との出会いから、歌子という名を賜り、女子教育に目覚め、皇女教育のために欧米視察に出たことからさらに視野が広がって、実践女学校の創立を見ることになる。下田が、美子皇后の女官であつたことはよく知られているが、貞明皇后との関係が、皇女たちとの関係とは別の意味で非常に重要であると考えられる。原武史は、『皇后考』<sup>27</sup>の中で貞明皇后の難しい立場を、また、男子にしか皇位継承がない故に軽んぜられる皇女たちのことを書いているが、皇后の立場の難しさと皇室の近代化、並びに世継ぎ問題と一夫一婦制の確立の難しさにも触れている。

大正天皇の皇后節子は、「健康申分なし」ということで選ばれた妃で、それ以前の伏見宮貞愛親王の第一王女禎子と皇太子の婚約解消後に選ばれたが、容姿に問題があつた。見た目の問題よりも皇子を生むことが重要だとの判断によると考えられ、歌子自身の評価も驚くほど消極的であつたことが記されている。<sup>28</sup>このような歓迎されない状況で第一子裕仁を生み、第二子を懐妊してから「精神的落ち込み」がひどくなり、原は、「このとき、皇后美子の分身として動いたのが下田歌子であつた」と指摘している。<sup>29</sup>『皇后考』に詳しいので、ここでは深く追わないが、元となる資料の

確認は必要である。このときに特筆すべきは、歌子が神功皇后の講話を行ったことである。皇后は天皇とは違い、生まれながらに皇后であることはできず、嫁して皇后となる身である。そしてそのロールモデルは、神功皇后や光明皇后のような古い時代からとられている。また、原が指摘しているように、歌子が神功皇后の何を強調して節子皇后に伝えたかも重要である。問題が大きいので、稿を別に立てることを考えたいが、神功皇后については『愛国婦人』に掲載された経緯もあり、板垣弘子編の『下田歌子著作集』にも再録されている。これを契機として節子皇后と歌子の関係が強くなり、節子皇后に対して裕仁も非常に神経を使う強い存在となっていくことや、乃木希典のように下田歌子の影響力を嫌う人々が出てくることにも十分に配慮して見ていく必要がある。つまり、美子皇后の影響下にあつた歌子が、華族女学校で教えたこともある節子皇后に影響を与える存在に変わり、節子皇后が歌子の力を得て、強い皇后に育つにつれ、さまざまな難しさを抱えることになる。つまりはここにも政治的な力学が働くのである。

そのほか、現在の下田歌子研究の状況を文学的側面から概観すると、小林修教授(当時)によって平尾鉞の和歌の力量と評判が明らかになってきた<sup>31</sup>、宮中への出仕に至る経緯を明確にするものとなり得ると考えられ、さらに「歌子」名下賜前後の状況も明確になりつつある。しかし、『香雪叢書』においても索引等がなく、研究のための便宜が十分でない。創立一二〇周年を迎えて

も、下田歌子が美子皇后から「歌子」という名を賜ったというこ  
と以上に和歌の名手であつたことについての証明が十分でないだ  
けでなく、作品群を整理し切れていないのは、問題であり、今年  
度は多くこの点についてのご指摘を受けていることを重く受け止  
め、研究所全体の課題としてほしいと願っている。また、本学国  
文学科には、木俣修教授が在籍されていた時代もあり、その薫陶  
の下にあつた卒業生には、是非読解の面でもご参加願いたい。さ  
らに、速記録が残っている下田歌子の「源氏物語講義」について、  
こちらは、速記の解説が難しい状況が続いているので、さらに  
ハードルは高いが、AIの進歩により、くずし字が読めるように  
なりつつある今日、速記についても読める可能性が生まれたと言  
えると考えている。この先も諦めることなく、可能性を探り続け  
るべきであると考えている。実践の国文学は、下田歌子の和歌と源氏  
物語が源流にあり、そこから下田歌子が執筆した日本語学に関わ  
るもの、女性の生き方や歴史につながるものなど裾野が広がって  
いる。もちろん、下田歌子の学問的守備範囲は広く、家政学や人  
間工学のようなものなど、文理をまたいで広く優れた見識を持つ  
ている。そのことも含めながら多方面にわたって研究が発展する  
ことを望む。

本稿では、政治思想的な問題を提起しているが、下田の関わつ  
た帝国婦人協会、愛国婦人会と、軍国主義の色彩の強い国防婦人  
会との違いなども明確にしていかなければならない。戦争未亡人  
に対する福祉や自立支援などの観点があつたために、下田の亡く



なった昭和十一年以降、国防婦人会に飲み込まれた可能性は考えられるが、戦後の一時期、下田歌子について語り難い時代を持つたことは、学園の不幸である。

その他、歌子の生涯についても不明な点が残っている。たとえば、結婚時期の問題や下田資料内にある難読戸籍資料について、判読できても事情がよく分からず、歌子の養子の存在も明確になっていない。このようにまだまだ年譜上の問題も多く抱えている。

節子皇后には神功皇后の力強さを説いた歌子であったが、歌子自身が好んだのは、春日局ではなからうか<sup>34</sup>という板垣弘子の口頭での指摘もあり、まだまだ、解明されていないことが多く残されていることを見定めながら、ひとつひとつ下田歌子の全体像の把握に取り組んで行きたい。

## 注

- 1 『月刊おとなりさん』（大田区地域誌…2012年2月343号）p.10-11。なお、この写真の掲載については、この雑誌の発行所である株式会社ハーツ&マインズ、西村隆太氏から許可を得ていること、併せてこの絵はがきの提供者である石田晃浩氏の許可を得ているものであることを明記しておく。
- 2 馬場信行「明治後期から昭和初期の京浜電気鉄道による羽田穴守海水浴場施設の運営実態及び集客戦略の研究」（公益法人日本都市計画学会『都市計画論文集』vol.52 No.3 2017年10月）前掲書「明治後期から昭和初期の京浜電気鉄道による羽田穴守海水

- 4 浴場施設の運営実態及び集客戦略の研究」p.359
- 5 前掲書『月刊おとなりさん』p.11
- 6 青木武雄『報知七十年』1941年 報知新聞社 p.55「明治四十四年七月九日」の項目記事による。
- 7 岡田智秀・横内憲久・福田朗大「海の利用の変遷からみた大田区臨海部のまちづくりに関する研究」（『景観・デザイン研究講演集』No.6 2010年12月）
- 8 『読売新聞』東京版 明治四十四（1911）年7月10日 月曜日
- 9 「クイックスタート」機能は、マイクロソフトのOffice 365に付加されている機能であると本学情報センターよりご教示を受けた。出典がウィキペディアであるので、二〇一九年十月作成時のものであることも付記しておく。
- 10 『地震』第2集第22巻（1969）253-255頁による。
- 11 『地震』第2輯第23巻（1970）335-336頁による。
- 12 津田梅子の資料として目を通しているものは、『津田梅子文書』（津田塾大学1980年）、吉川利一『津田梅子』（昭和5年2月 婦女新聞社、1990年中公文庫）、山崎孝子『津田梅子』（昭和57（1982）年7月 吉川弘文館）、大庭みな子『津田梅子』（1990、2019年 朝日文庫）など。
- 13 前掲『津田梅子文書』年表 p.546、前掲書、山崎孝子『津田梅子』p.107、略年譜 p.296、真部美佐「昭憲皇太后と華族女学校―設立及改革に果たした皇太后の役割を中心に」2006年『書陵部紀要』58号 宮内庁書陵部 p.44
- 14 「下田歌子小伝」は昭和57年実践女子学園が制作した小冊子。製作当初は学園が学生生徒に配布していたと思われるが、その後、一般社団法人教育文化振興実践校会が、新入生に配布を行うようになったが、さまざまな問題点が指摘され、現在は、配布されていない。漫画『きらり うたこ』が現在学園から配布されているが、「小伝」に換わるものはない状況にある。

- 14 『下田歌子先生伝』(昭和18年10月 故下田校長先生傳記編纂所財團法人帝國婦人協會實踐女學校内) p. 183
- 15 『実践女子学園一〇〇年史』平成13(2001)年3月 p. 12-19
- 16 下田資歌子データベース、資料番号876・877
- 17 前掲書『津田梅子文書』年表、前掲書、山崎孝子『津田梅子』p. 107-109 前掲書、大庭みな子『津田梅子』p. 118
- 18 前掲書、山崎孝子『津田梅子』p. 110 略年譜 p. 296-297
- 19 前掲書、山崎孝子『津田梅子』p. 114-115
- 20 前掲書、山崎孝子『津田梅子』p. 115
- 21 加藤靖子『華族女学校をめぐる政治』『大学史研究』第28号(2019年11月、大学史研究会) には、もつと具体的な政治的動向が記述されているが、本稿締切後に著者より抜刷惠贈を受けたので、ここでは紹介に留める。
- 22 前掲書、真辺美佐「昭憲皇太后と華族女学校―設立及改革に果たした皇太后の役割を中心に」2006年『書陵部紀要』58号、p. 48
- 23 奥田実紀『タータンチェックの文化史』(2007年 白水社) によれば、森陽外は「タータンを使って身分と性格をにおわした」とし、その例に『青年』の高島詠子をあげている。主人公純一にとって、詠子は、「偉く、賢く英雄のように思え」る女性であり、そこで用いられているタータンは、「経済性、地位、実力、流行の先端をいく東京を総合したまさにトップの風格を表現している」と述べている。さらに「明治期の」タータンは、高級で貴族的なイメージであった」と述べている。高島詠子は、下田歌子がモデルであることを考えれば、やはり「豪華」であることが分かる。
- 24 前掲書、大庭みな子『津田梅子』p. 165-166・p. 168
- 25 前掲書、山崎孝子『津田梅子』p. 117
- 26 前掲書、大庭みな子『津田梅子』p. 168-170
- 27 原武史『皇后考』2015年講談社、2017年講談社学術文庫
- 28 前掲書、原武史『皇后考』p. 135-138

- 29 前掲書、原武史『皇后考』p. 164-168
- 30 原は『日本政治思想史』(2017年放送大学教材)でも、同様の内容を述べている。(p. 170-172)
- 31 小林修「下田歌子の宮中出仕と『歌子』名下賜についての覚書」『歌子』第19号(加藤裕一教授退職記念号) 2011年3月
- 32 小林修「下田歌子の宮中出仕と歌子名下賜前後の考察」(『明治聖徳記念学会紀要』復刊50号)、小林修「上京以前の下田歌子―父・平尾録蔵筆「己巳九月備忘の記」より」『実践女子大学下田歌子記念女性総合研究所 年報』第5号 2019年3月
- 33 藤井忠俊『国防婦人会―日の丸とカッポウ着』1985年4月岩波新書
- 34 原武史『女帝』の日本史』(2017年10月NHK出版新書) には、女性天皇や皇后、女性権力者に触れる中で春日局も項目に上がっている。原が、終章で「なぜ女性の政治参加が進まないのか」という項目を立てていることとともに、下田歌子を考え、日本の女性を考える上で、大変興味深い問題である。

# 付記

本稿は、二〇一九年十月五日一般社団法人教育文化振興実践校会の秋季運営委員会講演会において、「下田先生再入門」と題して講演した内容に基づいている。

(たかせ・まりこ／下田歌子記念女性総合研究所 兼務研究員・部門長

短期大学部日本語・ミニニケーション学科 教授)

---

## Utako Shimoda chronological history study from Umeko Tsuda material and others

---

TAKASE Mariko

The problems for thinking of Study of the chronological history of Utako Shimoda. First the name of an era and a problem of changing the name of an era. Second, the relation between a lunar calendar and a solar calendar. About the achievements about the 31-syllable Japanese poem (modern tanka) of Utako, proof is not accomplished enough this is not proved enough and there are also no indexes of her tanka. I also have to see the relation between Utako Shimoda and the empress of the Taisho Era as well as a relation between Utako Shimoda and the empress of the Meiji Period. From the news of Umeko Tsuda and Hirobumi Ito, I know movement of Shimoda. In addition, Shimoda might be rolled up in political movement. It's possible to think Utako Shimoda had her own special viewpoint in the Meiji Taisyo period. We can say that she was a pioneer of gender-equal society.